

第2節 ミSSIONナリーの想い (来日順 15名)

シスターメリーアン・ヒュールシング



シスターメリーアンが日本に派遣されたのは1958年のことでした。日本語研修の後、シスターは中学・高校で英語を教え、管理職にもたずさわりました。最初の任地は京都のノートルダム女学院で、副校長も務めました。次の任地は、兵庫県西宮市にある仁川学院中学高等学校女子部でそこではシスターは校長を務めると同時に、英語も教え、教職員との良い関わりを今でも懐かしく思い出しておられます。「私のクラスの2人の生徒が、大阪の万博で通訳者を務める選考にパスしました!日本とアメリカのパヴァリオンで働くことになり、一緒に喜び合ったことを今も覚えています。あの時期には、良い思い出がたくさんあります。そのころの教職員や卒業生とは、長く交流を持っていました。」とシスターは思い出を語って下さいました。

ノートルダム教育修道女会が、三重県の四日市市で障がい者施設の運営を依頼され時、シスターは新しい修道院の院長に任命されました。残念ながらSSNDは、このミッションから1年後に撤退することになりました。その後、シスターは名古屋の南山中学校に英語の教師として派遣され、1970年3月にアメリカに帰国されました。

SSND日本ミッションが創設50周年を祝った1998年に、シスターメリーアンが日本を再訪され、一緒にこの特別な時をお祝いできたことは大変うれしいことで、神様からの贈り物だと感謝してい

ます。

(来日 1958) (文責 Sr. ジュディス)

シスタージョーン・モーレム



最近“人生を変えた出来事”という表現をよく耳にします。日本での奉献生活や使徒職のことを思う時、その経験が私の人生を、色々にまた素晴らしく変えてくれた、と気づきます。

まず、日本で得た最高の賜物は友情です: SSNDと、他会や一般の人々と、そして卒業生と絆ができました。今でも連絡をとる人もあれば、亡くなってしまった人もあります。でも関わった全ての人が残っています。ありがたい気持ちです。

もう一つ大切なことがありました。仏教(浄土宗と禅宗)との出会いです。私は法然と親鸞を聖人として崇敬します。私自身の祈りや使徒職の霊的指導を行う際、今でも座禅を組んで呼吸を整え心を研ぎ澄ますようにしています。感謝しています。

最後に、アジアで過ごした年月は、私の視野を広げてくれました。世界市民となるようにと私を喚起してくれたのです。私は合衆国だけではなく、経済的にも地政的にもより広い考えで現実を見る

ようになりました。感謝しています。

全てに感謝!

(来日 1963)

シスターテレサメリー・レブストック



日本滞在は忘れがたい体験で、はかり知れない賜物でした。日本文化に初めて触れた時、私はSSNDの前進を感じました。

来日当時、ノートルダム女子大学では初めての卒業生を送り出す準備をしていましたが、文部省が定めた英語教員の教職課程がまだ不十分でした。私は実にタイミングよく来日したのです: 到着して、荷物を解き、新学期が始まって早速、条件を満たすため3回生と4回生を教え始めました。

初めての日本人女子学生、授業、大変な努力、垣根を越えた繋がりとその楽しさを思い出します。

そして最初の卒業式を終え、私は東京に移動し、日本語学校で勉強を始めましたが、途中で事情があり、急きょアメリカへ戻りました。けれども、未だに続く卒業生との繋がりは本当に嬉しいものです。彼女らは成長し、変容し、もう孫を持つ身となり、送られてくる写真を驚嘆の思いで眺めています。

二度目の日本滞在では、名古屋の南山大学に使徒職を持ちました。京都へは行ったり来たりし

ましたが、やはり来日初期のシスターや学生の印象は強く残っていて、今でもありありと思い出し、祈りの中には彼女たちが居ます。

修道院の若いシスター達が成長し、人々の間で使徒職を行う姿を見てみたかったです。

私たちは、神の实在を素晴らしく表現することで繋がっています: 変化と成長と前進する力——彼女たちの記憶から私は薄れてしまったかも知れませんが、私はあのころの皆の思い出と、東洋での暮らしの思い出をしっかりと抱えています。日本は私の心の大きな部分を占めています。

(追: 東海岸在住の卒業生達がSr. マイケルを訪ねて来た話をご存知ですか? 私はその中の“よう子ちゃん”から、Sr. マイケルの居場所のことを聞かれ、新住所を知らせました。それでそのグループが集まったようです。きっと日本語で楽しいひと時を過ごしたことでしょ。)

(来日 1964)

シスタージョーン・シュミット



私は日本のSSNDと長年共に暮らし、教育の変容を目指し努力を共にしました。

日本でのその長い年月に感謝します!!! 私はこの経験によって大変多くを会得したと感じています。最大の賜物は「適応」ということの意味を実際に知り得たことです。異文化、他言語、食べ物、仕事意識、霊性などへの適応のことです。この全てを通して、私は、私の限界や私の強さなど、

自分自身について学んだのです。困難な時期には神に救われ、その永続的な存在についても学びました。また、インドの教育プログラムに携わり、他のアジア地域に奉仕の範囲を広げることができました。この時いただいた支援をありがたく思っています。日本のシスターズ、おびたしい数の教え子たちとの友情に深く感謝しています。本当に Arigatol!

(来日 1965)

シスターカミール・シドロウスキー



カトリック教会のため、SSNDとして私が携わったミSSIONナリーの仕事は、いろいろに変容していきます。まず、沖縄のクライスト・ザ・キング国際高校の校長に赴任しました。この学校の生徒たちの文化背景は15に及びました。その一つ一つが独特の美しさを持ち、同時に多くの共通点も見られました。神の家族の美しさを知り、私の人生は高まっていきました。私は高校生に宗教を教える恩恵もいただきました。カトリックの生徒もいれば、他の様々な宗教の生徒たちがいました。

この学校は日本の学校制度に組み込まれ、私は次に京都のノートルダム女学院で英語を教えることになりました。古い伝統の地に身を置き、再び私の人生は豊かになりました。京都で私は日本の独特の文化を色々な面から肌で感じました。何という賜物だったことでしょう!

アメリカに戻った時、私の指導のあり方は豊かになっていました。日本での経験の全てに良い影響を受けたからです。神の家族、神の民と直に触れ合うことによって、また、それぞれの文化や伝統によって、わたしの人生は変容していました。世界的視野で物事を見るようになったのです。しかしいろいろな視点で見たものには、共通点があるとわかります。私たちの神は何と偉大なのでしょう!

(来日 1970)

シスタージョアン・コルディエロ



シスタージョアンが日本に派遣されたのは1974年のことでした。日本語研修の後使徒職が始まりましたが、シスターの日本での使徒職は常に英語教育でした。最初の1年間はノートルダム女学院、その後の18年間はノートルダム女子大学において英語教育に献身されました。女子大在職中に、シスターは一年間のサバティカルの年を持ち、東京で禅の研修をされました。シスターは東洋の靈性に深く心を惹かれておられたからです。

1995年にシスターは日本でのミSSIONを終え、アメリカに戻られました。

(来日 1974) (文責 Sr. ジュディス)

シスターモーリン・ブリンカー



1949年私は修練院にいて、終生誓願に備えていました。ですから今年、日本のSSNDの70周年を、自分の70年ジュビリーと共に祝うことができます。大変幸せなことです。マザー・イヴアンジェラが新しい日本ミSSIONについて話してくれた場面を、今でもはっきり思い出します。その29年後(1978-1999)に私自身が京都のノートルダム女子大学で教えることになろうとは夢にも思っていませんでした。日本のシスターは、皆とても親切で、過ごした修道院での分かち合いにも感謝します。それ以上は望めないほどの文化交流と変容を私は体験しました。

1999年、退職と同時に、21年間の海外ミSSIONナリー人生に区切りをつけ、私はセントルイスのマザーハウスに戻ってきました。Sr. アンシラから“一心”という書を贈られ、それを携えて帰ってきました。その額は、今でも私の寝室に掛かっています。一つの心という願いが、私の祈りの中心になっています。私は日々、SSNDが示す“一心”を神に感謝しています。

(来日 1978)

シスタードロシー・ヴェンハウス



1985年日本地区から招きがありました。私は出生時に洗礼を受けましたが、

彼らの大半は最近改宗した人達でした。私はマリア様のように尋ねました“どうしてこのようなことがありえるのでしょうか?”と。日本語も日本の文化も知りません。セントルイスのワシントン大学の日本人教授にも、精神科医にも、助言を求めました。視覚障害の弟の世話のことも考えましたが、私はとうとう受け入れました。

一年間日本語を勉強しました。そしてノートルダム女子大学で音楽担当の依頼がありました。一緒に住んでいる日本人シスターが助けてくれました。翌日の授業で言いたいことを、ローマ字に直してもらいました。この作業で私たちは多くを分かち合いました。しばしば彼らは日本の神社やお寺の美しさを伝えてくれました。日本文化の美しさも教えてくれました。これらの美は神の業です。日本の学生生徒、シスター、人々は目に見えて美しかったです。

日本滞在中に弟が亡くなりました。葬儀のために急ぎ帰国のフライトに乗りましたが、その時故郷では奇跡が起こっていたのです。午後3時～8時まで、障害者と貧しい人のためのミサが続きました。定年後の紳士が後見人のように弟に付き添って来ていました。私の代わりに神様が手配して下さったのでしょうか。

(来日 1985)

シスターアンデレ・モーリン・ソーティ



私は1986年1月に日本地区のメンバーになりました。

40歳でも語学習得できると希望を持っていました。時間をかけて勉強しましたが、何とか生きていけるレベルの日本語しか習得できませんでした。

そんな私を支え、留め、日本や日本の姉妹を愛し続けたのは、日本のシスター達がカリスマを美しく忠実に生きる姿ゆえでした。

初めの赴任では、アメリカ人MISSIONナリーのSr. ヴィヴィアンとSr. クラリアと一緒に、鹿ヶ谷修道院に住みました。二人は「自分の人生を人のために捧げる」生き方の模範のようなシスターでした。そして、その生き方が、日本のシスター達に反映しているのが見て取れました。

私は鹿ヶ谷、松ヶ崎、清水町、岩倉、それぞれの修道院で、一員として暖かく迎えられました。そして、自分と違う文化を持つ人々の中で生きるという、美しいチャレンジを洞察できるようになったのです。おかげで私の視野は広がり、世界に広がる考え方ができるようになりました。

今、私は、ネパールのバンディプールの修道院で、また違う環境でチャレンジを続けています。ここでアメリカ文化と日本文化を、第三となるネパール文化に組み入れています。違いを受け入れ違いを愛する気持ちが自分の中にあるのに気づきます。困難や葛藤はもちろんありますが、文化の違いが私たちの使徒職を制限したり抑制したりするはずはないのです。

永年の海外MISSION生活の中で、カルチャーショックというものを数回経験したように思います。しかし、日本とネパールの生活から得た賜物は、それよりずっと大きいのです。

(来日 1986)

シスターメリー アン・モーリー



日本へのMISSION体験はとても豊かなもので、今でも私の人生の歩みに織り込まれています。日本のシスターも一般の人々も皆、人そのものの美しさと、文化の美しさを分かち合ってくれました。自分からも同じようにして見せたのですが、私がお返しに得たものは随分大きいものでした。

国際共同体であるということ、私は、修道会全体としても、地域レベルでも、生きた現実として経験しました。それが私の国際理解を深め、今、広く地球規模で生きることへの招きに応えたいと思えるのです。日本のシスターは、共に過ごした海外MISSIONナリーに、未だ変わらぬ好意を示してくれます。その気持ちにいつも深い感動と感謝の念を覚えます。

皆さん、70周年おめでとうございます。日本にノートルダム教育修道女会の精神とカリスマが、今後も広まり、感じられ、実現されていきますように。

(来日 1987)

シスタージュリース・ボッツ



日本でのサマープログラムのあと、私は京都で3年間の使徒職を希望しました。このような気持ちになったのはお恵みだと思いま

す。滞在中、個人的にも共同体の中でも、愛の分かち合いがありました。日本での愛の暮らしによって、どんどん姉妹間の接触が保たれ、さらに神の存在を意識するように導かれました。“ナマステ”が私のスローガンになったのは、まさしく日本の3年とその後ネパールの6年によるものです。この挨拶は、両手を胸に付けて合わせ頭を下げながら言います。このサンスクリット語が象徴するのは普通の神であり、神はいたるところにおられ、私の中にも目の前のあなたの中にもおられる、という深い意味から相手に敬意を表すのです。シスター達との出逢い、また神の宇宙との出逢いは、私の賜物です。その経験から同情、優しさ、愛、平和、黙想、行動などが生まれますが、この挨拶はその際の原因力となります。NAMASTE 私の神があなたの中の神に挨拶をしています。

ありがとうございます。

愛とハグを贈ります。

(来日 1991)

シスターアーリン・サイモン



教師だった私の父は、冒険心を持って生涯ずっと学びなさいと、家族に奨めていました。そしてマザーテレジアも学びの生涯を送りました。父と同じ考えです。私もまた冒険の人生を送る学び手です。

1991年、私は神に呼ばれ、日本のサマープログラムに参加しました。父にならって、私はすぐさまガイドブックを読み、日本語も少し勉強しま

した。到着後、まず空港で日本のトイレを体験しました。かなりのショックでしたが、大丈夫でした。私は異文化にオープンで、順応できました。サマープログラムでは、日本の歌、色彩、踊り、祭り、書道や茶道の繊細な雰囲気味わいました。Sr. ルース森は、子供時代広島に住んでいて、原爆投下を体験しました。私たちをその場所に案内し、彼女のつらい記憶を語ってくれました。私は感極まって震えたほどです。サマープログラムはあっという間に過ぎ行きましたが、日本の気分が残り、大切な思い出が体をめぐります。本当に私は変容しました。夢のように。それで、アメリカ式の自問を試みたのです。“文化交流で神様に呼ばれるのはどんな感じだろうか？日本に行くことは現実に起こるだろうか？”

私はシカゴで日本語コースの聴講生となりました。そして何とか日本語でやっていけそうだと感じるようになりました。それはとても良い気分でした。3年待ちました。1994年、シカゴに戻ったシスターを引き継ぎ、私は夢の日本へ旅立ちました。日本のSSNDの修道院や日本のSSND学校に適應するよう、私は可能な限り自分を変えました。8年間毎日日本語の勉強をし、認めてもらう日が続きました。同じ文でも「～ね」と「～よ」の正しい使い方があり、Sr. マリス・ステラが食事の折にそれを示してくれた時には、体中に電気が流れたようでした。ミサと修道院の祈りを毎晩日本語で準備しました。Sr. メリー・グレースがローマ字読みのものから普通の日本語に昇格させてくれました。するとさらに準備が必要になりました。そうしたある日、Sr. グレースに“あなたはもう祈りの先導ができますよ。”と言われました。何て大変なことでしょう！でも私はこの上なく嬉しかったのです。この時も頭の先から足の先まで電気が流れました。

日本のシスター達はまさに合意のお手本です。岩倉修道院のミーティングで、増築部の外庭を作り替える話が出たことがありました。レンガの中庭、土を温存、芝生を植える、などの選択肢がありました。レンガ案が優勢で、私も外国人なので敷石を提案しました。みんな一生懸命考えてくれました。そこで誰かが、“芝生に飛び石はどうかしら?”と言いました。全員が異議なく穏やかな解決に至りました。驚嘆の思いでした。

ノートルダム諸学校では、全ての先生や全ての生徒学生がSSNDの歴史と伝統を大切にしていました。小学校で、廊下を跳ね行く子供たちがマザーテレジアの像の前でストップし、お辞儀してからまた飛び跳ねて行くのが何と可愛かったことでしょう。朝の祈りの放送があり、子供達はいっしょに祈ります。これは、彼らをカトリック教徒にして組織の中に組み込むのが目的ではなく、イエスが私たちに示した生き方を教えるためです。

日本で8年過ごし、私は2002年にアメリカに戻りました。シカゴの双葉学園で2年教え、日本にいるような気分でした。シカゴの日本大使館での日本文化の映画鑑賞に参加しました。しかし帰国ミッションナリーは難しいものです。私には、帰国したことで変化はありましたが、戻ってから冒険がなかったのです。改めて自己養成を行うために私はシカゴを去りました。日本で年月を愛しすぎていて、簡単には放念できないのです。私の心の大きな場所を日本が占めています。私の人生にこのような経験を与えてくれた両国のSSNDに心から感謝します。

(来日 1994)

シスターバーバラ・ソーティ



ネパールに初めて行ったのは、終生誓願に向けて準備をしていた1999年の秋から冬にかけての4か月間でした。高学年の生徒たちに英語を教える仕事は大変楽しかったです。ネパールの自然の美しさや文化や伝統を学ぶのは喜びでした。同時に不衛生や欠乏に当惑し、不便さを経験しました。ネパールの食べ物(ダルとお米)、煮沸・濾過して作る飲料水、電気は途切れたり停まってしまったり。ロウソクの明かりで食事をし、洗濯物は手洗いです。水道から水がちゃんと出るのを待つ日が続きました。慣れないことばかりでしたが、それほど辛くはなかったのです。毎朝コーヒーを飲みながらテラスから眺める朝日は、すべての不都合を帳消しにしてくれました。4か月が過ぎ、早い段階でまたネパールに戻りたい旨、希望を出しました。メリノールの識別プログラムに参加した後、2000年の秋にバンディプールに戻りました。

その時はちょうどネパール政府軍とネパール共産党毛沢東主義派(マオイスト)の間で内戦がピークに達していました。私は11年生と12年生を教えていましたが、マオイストの圧力で、授業の中断や終了を強いられることがしょっちゅうでした。ニュースを見れば、一般市民や警官、学校関係者、政治家などが暴行・殺傷される話ばかりでした。警察は頻繁に攻撃を受け、皆殺しにされたうえ、戦略の情報資料を盗まれるのでした。

可能な限り授業を行い、できるだけことはしていました。しかし、ついにノートルダム閉校の指示が出ました。私たちは私学の中でも最後まで頑張ったほうでした。何とか5月まで残留し、

授業計画を終えました。同僚の先生たちのために推薦状を書いて、生徒ともども他校で教育を続けられるように努力しました。シスターは2001年の5月には全員ネパールを後にしました。その一ヶ月後、ネパール宮殿にて王族殺害があり、国は分裂と政治不安で混乱状態が続くこととなりました。

2006年8月にネパールに戻ると、何もかもがすっかり変わっていました。SSNDのコミュニティーは、以前のグループから残ったSr.ミリアムテレーズを除いては新しく編成され、シスター達は学校教育で管理的立場から補助的立場になっていました。しかし、すぐに事態は劇的な移行を遂げます。校長を務めていた神父様が司教座聖堂に呼ばれ、Sr.エヴァンジェラが校長代理に任命されました。「代理」となったのは、政情が不安定で、学校はまだ脅威にさらされていたからです。代理だからこそ学校を守ることができたのです。バンディプールの4人のシスターは速やかに、また自然に運営責任を引き継ぎ、落ち着きました。それぞれの技量や経験が大変有利に働きました。ストライキや混乱は国中で起こっていました。しかし、2008年5月にネパール最後の国王ギャネンドラが退去し、ネパールが王制から民主共和国になると、混乱は次第におさまっていきました。現在はマオイストとネパール共産党が、中央・地方ともに政権を執っていて、分裂や混乱は少なくなっています。いくらか進歩が見られ法律も改定されましたが、国は、恐ろしい貧困、インフラの遅れ、学校教育の遅れ、激しい貧富の差から脱することができていません。

ストライキや暴動などは今ではほとんどなくなり、ノートルダムは国でトップクラスの学校になりました。私は引き続き11年生と12年生に英語を教え、2007年から理科のコースの調整を担当しています。何年にも渡って何百名もの生徒を教え

てきましたが、彼らはみな能力と意欲を示し、私を驚かせ続けてくれます。この若者たちは男女とも国の伝統や習慣や生活様式をつなぐ役目を立派にこなしているだけでなく、ノートルダム教育で培った価値観や知識や技能を立派に習得し大人になっていきます。

バンディプールの村は1999年以降めざましく発展しました。ホテル、レストラン、現代的な宿泊施設がいたるところに見られ、道路が建設され、商店街には以前なら想像もしなかったような日用品が並んでいます。ノートルダムの学校も変わりました。今では簡易宿泊施設を備えたり、太陽熱発電の装置が3棟につけられたり、無線インターネット接続ができたりするのです。今の子供たちはテレビや携帯電話を楽しんでいます。よい変化もあれば悪い変化もあると言えます。

私は人生で一番有意義で満足のいく教育体験をネパールでしました。私は自分の才能や技量を十分に生かす機会に恵まれました。しかも美しい山や森に囲まれ、自然の中で簡素な生活を楽しみました。生まれ育った環境からほど遠い途上国で生活し仕事をするに限界を感じる人もいます。どうしてそのような暮らしに耐えられるのかと疑問を持つ人もいるでしょう。私にとって、その答えは簡単なものです。制限下での暮らしという意識がさほどないからです。人々の進歩や発展のために教育する喜びの中で、生活環境というものはただその一部なのです。

(来日 2000)

シスターベティ (エリザベス・アン)・ ユキテル



20年経った今も、日本のSSNDの思い出は私の頭に焼き付いています。そして私の心は喜びと感謝でいっぱいになります。Sr.ベアトリス田中校長を通して、日本の教育システムと先生たちの専門性を初めて見た時の驚きをありありと思い出します。私はミルウォーキーの聖ローマン小学校で校長を務めていて、Sr.ベアトリスはじめ当時の先生方を招いたことがありました。既にその出会いがあったので、私はとても恵まれていました。シスターとの友情が再燃し、先生方との友情も生まれました。

先に、ネパールでシスター達と一緒に過ごしました。その経験も神に感謝したいです。シスター達は、ネパールのような貧しい国を選び、ほとんど何も手に入らない状態から山の学校を作り、国でトップクラスの学校に仕上げました。これは、神に呼ばれた場所どこへでも喜んで行くという信念と願望の証しであり、そのことに畏敬の念を覚え、貧しい国で、当初かなりの苦難があったにも関わらず、シスター達が示した勇気、決意、異文化を共感的に尊重する態度には感心するばかりです。ほんの9カ月で起きた奇跡を私は目の当たりにしました。その後毛沢東思想による暴動によって2000年5月にバンディプールのノートルダム学校を閉鎖しなければならなくなりましたが、バンディプールの山の上で簡素に生きるシスター達の暮らしを共に経験して、私は心を打たれました。

70周年おめでとうございます。日本のシスターの愛にあふれた証しに、神様が報いて下さいますように。素晴らしい経験を与えていただいたこと

に心から感謝します。

(来日 2000)

シスターキャスリーン・ ウェーグマン



Q: ミッションナリーとして日本に住んで、自分の何が変わりましたか?

日本での生活によって、私は人生で一番大きな変容をとげました。私たちのカリスマを、日本の共同体や使徒職の中で実現するのは、全く新しく、それでいながら何かしら親しみを感じるものでした。信仰とカリスマに根差して生きる私たちは、異なる点より共通点のほうが多いとわかりました。

Q: 日本滞在で特に印象に残ったことを教えてください。

皆さんがSSNDであること、神と教会への皆さんの忠誠に、私は深く感謝します。日本滞在はまさに賜物でした。共に味わった楽しさ、共に作った思い出、共に取り組んだ仕事を、私はずっと大切にします。日本のシスターのおかげで私はよりよいSSNDになれました!

感謝のうちに

(来日 2002)

シスターペギー (マーガレット・メリー)・ シュミット



日本は、私の初めての海外ミッション地でした。他の国で奉仕したことはありません。異なる文化の中に身を置くのは、とてもさわやかで元気が出る経験だとわかりました。二年の日本滞在は私の視野を広げ、私のアメリカ的価値観を再検討させました。メリノールのプログラムに次のような言葉があります：神は既にその場所におられる。だから行きなさい。違う場所で違う人々の中で神を知るために。私はこのことを行い、そしてものの見方が変わりました。

(来日 2003)

シスターメリー ホープ・ビリング



2013年の8月、神は最高の恵みを下さいました。ゴールデンジュビリーを祝った4日後に私は日本へ旅立ちました。私の夢が叶ったのです。

日本で5年半過ごし、とても豊かな経験をしています。私は日本のシスター達を助け、出来る限りの奉仕をしようと思ってやってきました。シスター達はとてもオープンで愛にあふれ、素直に私を受け入れてくれます。日本の文化に触れさせてくれますし、日本人の考え方や振る舞い方を教えてください。

日本の文化は驚くばかりに美しいものです。日

本文化は大きな喜びと内面の静けさを導いてくれるのです。

シスター達だけではありません。京都の一般の人々も暖かく友好的で、常にいろいろ親切にしてくれます。

他国から全てのSSNDが日本を体験する機会があればいいなと思います。日本のシスターがどんなに素敵か、その文化の中でYASを生き抜く彼女たちの希望を見られたらいいのに、と思います。マザーテレジアが日本のシスターに微笑みかけているのを感じます。彼女たちは日常生活の中で神の御意志を追求し、神への愛と他者への愛によって自分が変わりゆくのに身を任せています。

神への愛と神の御業のうちに成長する日本のシスターを、神がいつも祝福して下さいますように。

(来日 2013)

